# 令和５年度　第１回とみやわくわくミーティング　実施報告書

| | |
|---|---|
| テーマ | 市民活動について<br>～みんなの活動をよりよくするには～ |
| 日　時 | 令和５年７月 28 日（金）13：30～15：30 |
| 場　所 | 成田公民館　第３研修室、会議室 |
| 座　長 | 宮城大学　事業構想学群　准教授　佐々木　秀之　氏 |
| 参加者 | 一般参加　13 名<br>宮城大学学生　3 名<br>富谷市　7 名（市長、副市長、総務部長、市民協働課長、市民協働課 3 名）<br>傍聴者　1 名 |

＜次第＞

1.開会

2.挨拶　　富谷市長　若生　裕俊

本日は、令和５年度第１回目のとみやわくわくミーティングにこのように多くの皆さんにご参加いただきまして本当にありがとうございます。

今回のテーマは「市民活動について～みんなの活動をよりよくするには～」ということでございます。それぞれ積極的に市民活動をされている方々、特にその中心的な役割を担っている方にたくさんご参加いただいているわけでございます。佐々木先生のお話にもありましたように、行政がすべて行える時代ではなく、市民の皆さんが積極的に活動する社会課題やそれぞれの思いを持って活動することを我々行政がしっかりと支援する、サポートする。お互いに役割分担をすることによって、行政だけでやるよりも数倍大きな力になると思っております。そういう意味では本市におきましては、市民協働、市民共創、そういった社会づくり、環境づくりに努めているところでございまして、佐々木先生にはこれまでも、まちづくり推進審議会の会長として、ご指導いただいてるわけでございますが、令和２年度、皆さんのご意見をいただきながら、「わくわくつながるわたしたちのまちづくり―富谷の協働ガイドライン―」の策定をいただきまして、その後、令和４年度はそれを踏まえて、市民活動の支援のあり方、いわゆるソフト機能の面について答申をいただきました。そして今年度はさらにもっと具体的な支援策について諮問をさせていただいて、審議会で審議をいただいているところでございます。そういう意味ではこのわくわくミーティングで皆さんからいただいたご意見をさらにその審議会の方でも審議いただいて、しっかりと市民の方々からまずは皆さんが活動しやすい環境、そしてそのことによって我々行政が果たす役割、市民活動を活発にやることによって富谷市全体がさらに活気ある住みたくなるまち日本一の実現につながると思っております。今日は貴重な機会になると思います。皆さんの忌憚のないご意見をいただければと思いますので、本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

3.座長紹介、市出席者紹介

4.担当課（市民協働課）より情報提供

それでは私からお手元に配布させていただいております、「市民活動について　～みんなの活動をよりよくするには～」としている資料に沿って説明させていただきたいと思います。

はじめに、富谷市の考え方についてご説明申し上げます。富谷市は総合計画において、まちづくりの将来像として「住みたくなるまち日本一」を目指し、健全なまちづくりに向けて、市民みんなが協働するまちづくりを実現することを目標にしています。都市化が進み、成長を続けている中で、まちの魅力と持続

可能性を高め、少子高齢化や災害発生時などの社会の変化に柔軟に対応していくため、世代や立場を超えた多様な人々がつながり、みんなの知恵と力を活かす「オールとみや」の体制で、誰もが「住みたくなる」、そして将来にわたって「住み続けたくなる」まちづくりを進めてまいります。

続いて、市民活動への市の支援、その取り組みについてご説明申し上げます。令和3年3月に、まちづくりに関わるすべての方々が、ともに力を合わせ、まちづくりに取り組むための考え方や方向性を共有することを目的として、「わくわく　つながる　わたしたちのまちづくり　－富谷の協働ガイドライン－」を策定し、協働のまちづくりを推進しているところですが、ガイドラインにおいては市民の皆さんが活動しやすい環境づくりの必要性が示されております。市民の皆さんが活動しやすい環境づくりについては、総合計画、協働のガイドライン、現状の課題を踏まえて、市における支援の在り方（主にソフト機能）、どういった支援が必要かについて、富谷市協働のまちづくり推進審議会から令和4年6月に提言をいただいており、今年度、令和5年度は具体的な支援方策について検討いただいているところとなります。

続いてA3判の資料をご覧ください。「宮城県内のNPO・市民活動支援センターについて」は県内12か所に整備されている各々の「NPO・市民活動支援センター」の状況を一覧とした資料となります。現在、富谷市における市民の活動を支援する主な拠点施設として、富谷市まちづくり産業交流プラザ（とみぷら）、公民館6館、富谷市社会福祉協議会が運営している富谷市ボランティアセンターがありますが、協働のまちづくり推進審議会からの答申においても施設の機能について、それぞれの支援施設をはじめ、町内会が管理運営している町内会館や、公園、道路などの公共空間など、既存の施設等を最大限に活用し、可能な限り市民の身近な場所で支援を行っていくことを考慮することが必要とされております。資料にもありますとおり、県内12か所に整備されている「NPO・市民活動支援センター」においてはそれぞれ、支援に必要な設備が設置されておりますので、富谷市らしい支援の在り方のなかで併せて整備していくことも検討する必要があると考えております。

市といたしましては、今年度、市民活動、町内会活動に関わる様々な方々の交流と意見交換の機会として、市民活動交流会、町内会交流会、わくわくミーティングを開催予定としておりまして、活動をされている中でどのような支援があったらいいな、こういう支援があったらもっと活発に活動できるというような意見をざっくばらんに出していただき、いただいたご意見をまちづくり推進審議会でさらなる議論を重ねながら具体的な支援方策につなげてまいりたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。私からの情報提供は以上です。

5.ミーティングレクチャー　(座長より)

ただ今、市民協働課より、資料をもとに富谷市における市民協働の取り組みに関する説明をしていただきました。総合計画では、住みたくなるまち日本一が掲げられているわけですが、市民協働は、この構想においても土台になるものだと思います。市民みんなが協働するまちづくり、オール富谷で、住みたくなる、住み続けたくなるまちづくりを進めていくという内容でした。実際に、富谷では、市民協働の取り組みが活発的に展開されており、令和3年には、富谷市の市民協働を可視化し、さらに広げていこうという目的で「わくわく　つながる　わたしたちのまちづくり　―富谷の協働ガイドライン―」が作成されました。

皆さんが想うガイドラインのイメージはどのようなものでしょうか？もしかしたら、もっと分厚いものだと思ったとか、色々なお考えがあると思います。このガイドラインは、とにかくわかりやすく、役に立つものを作ろうと心掛けられています。それと、このガイドラインは、市民の皆さんで作ったものなので学生でも読みやすいものになっていると思います。こういうガイドラインなどを作るときには、例えばプロの方にお願いするという方法もあるのですが、地域の皆さんで、実際に活動している人達が主体となっ

て、まさに手作りで作成しています。作成の時期は、コロナウィルスの関係で行動制限がかかっている間でしたので、今思うと、こういうことをじっくりとやる時間があったということも背景にあったのかもしれません。

コロナによる制限も緩和され、市民交流の在り方も再考していく時期にきました。市民協働課の取り組みでは、これまでの市民協働セミナーをリニューアルするということになりました。市民活動交流会と町内会交流会が実施されます。第1回の市民活動交流会は、富谷市内部での都市農村交流が行われます。富谷といえば、ブルーベリーですが、市民の方々の中には案外、生産現場を見たことがないなど、詳しくは知られていないところがあります。富谷のブルーベリーは6人の方々が始められ、そのうちの一人が若生市長ですが、協働のまちづくり推進委員会において、委員の佐藤政悦さんから、色々な地域に呼ばれて、ブルーベリーの話をするけれども、気づくと富谷の人に話したことがないな、という話がありました。これがヒントになり、新たにスタートする市民活動交流会の初回は、同じ富谷の中ですが、現地に出向いて交流してみようということになりました。コロナ禍では、皆さん忸怩たる思いで、活動をされてきましたが、この間、ガイドラインなどの整備を進め、富谷の市民協働のシステムも進化してきたということになります。

それでは、レクチャーに入ります。手元に配布しました資料をご覧ください。まずは、私の自己紹介ですが、今年から宮城大学国際交流・留学生センターの副センター長に就任しました。長年、地域連携の部門におりましたが、その経験を活かして、例えば地域フィールドワークという科目の海外版である海外フィールドワークを推進する役割を担うことになりました。コロナによる行動制限が緩和され、学生達も留学や海外体験が再開され、関心が高まってきました。富谷の市民活動においても、グローバル交流や他文化共生の動きが出てくることと思います。

まずは、改めて、「協働」について確認したいと思います。この言葉の語源は海外です。先ほど、国際交流や留学の話をしましたが、協働も海外との関係がありました。ヴィンセント・オストロムという経済学者が考えたコプロダクションという概念が元となっています。これが日本に入ってきたのは1990年で、学者である荒木氏が協働を、日本的解釈に表現し、日本に紹介しました。そして、2010年代に、特に東日本大震災を踏まえて協働の再定義をおこなっています。特に、協働の主体が、地域住民と行政職員と自治体職員から、異なる複数の主体とされたことは確認しておく必要があります。

今日、お話ししたいのは、この協働が、さらに変化しているということになります。残念ながら荒木先生は逝去されましたので、荒木先生による再定義がなされたわけではありません。共創という言葉が今、協働に変わって使われることが多くなりました。共創とは何かというと、企業が様々なステークホルダーと協働して、ともに新たな価値を創造するということで、何が違うかと言われると、私も考え込んでしまうんですが、協働というのがどちらかというと、例えば二つの主体、行政と地域住民が協力して活動するとか、或いは多様なセクターで協力して活動するというものですが、共創は、難解な地域や社会の課題の解決に際し、新たな価値を創造することで解決を図ろうとするところに特徴があると思います。共創の語源として、この「価値共創未来へ」という書籍は参考になります。これは、2004年に出された「The Future of Competition: Co-Creating Unique Value With Customers」の翻訳本なのです。新しい価値は、ユニークバリューと書かれていますね。これが共創のポイントになると思います。一見、答えのないような課題に対して、一緒に創造的に考えていくという時代に入ってきたのです。

次の資料は、実際に共創を進めるにあたってのポイントになります。地域の資源を活用する際、多様なステークホルダーが絡むわけですが、そこでは共体験が重要になります。何かちょっとでもいいから、プロセスの一部を、共に体験するということですね、それが共創になっていくんだという概念図になります。これ大学生が作ったので、もしかしたら、私が話すよりもこの図を見る方が分かりやすいかもしれま

せん。

他の自治体の状況を、最後に見ておきたいと思います。資料は横浜市の「横浜市の共創推進の指針」、2009 年に出されたものになります。共創を進めるための四つの原則が示されています。対等対話の原則、目標共有の原則、共創の取り組みを進めるためには、事業の目標を民間と行政が共有することが必要です。3 番目は、アイデア保護と透明性確保の原則。4 番目は、役割分担と責任明確化とされています。そして右側が、横浜の推進イメージですがこれをみると、協働の際の図とあまり変わらないような気がします。したがって、共創の時代ではあるけれど、敢えて言えば、やはり協働が大切ということになるのかと思います。そのうえで、共創のステージを目指すことが大事になってくると思います。

最後に、私が作成した共創の概念図をお見せしておきます。これは今年の 1 月に発刊された東北活性研究という、東北電力のシンクタンクが発刊している冊子に掲載されています。この価値共創プロセスは、行政やソーシャルセクターの課題に対してどのように共創したらいいかということを示しています。行政が推進主体となるものでも、様々なステークホルダーが絡み合っていくのですが、最初からうまく絡んでるわけではなく、プロセスの中でだんだんと絡んでいくということを下の方に図示しています。これが掲載されている「東北活性研究第 50 号」には、若生市長も寄稿されています。インターネットでダウンロードできますので、ぜひ全文をお読みいただければ幸いです。以上で、レクチャーを終わらせていただきます。

6.意見交換

**○グループ 1**

私たちの班では、ボランティアの話を中心に議論させていただきました。

課題や資源として出たことは、ボランティアをやられている学生さんが多いんですけど、ボランティアを募集している人となかなかつながることが難しいので、ボランティアをしたいという人とボランティアを必要としている人を繋げられるような機関が何かあったらいいなという意見がでました。

あとは、お年寄りだけではなくて、若者の近所付き合いが薄いということが、高校生や大学生の意見として出たので、若者でも話をするとか体を一緒に動かすというような、他の年代とも関われるような機会が必要ということと、あとは、こういうイベントをしますという話が出てもやはり高齢者の方は行くのが大変なので、送迎までを含めたイベントや企画を考えることが必要という話が中心に出ました。

**○グループ 2**

私たちの班では、高校生の方がいたんですけれども、学生の方は、移動手段が徒歩か自転車しかないので、市内に学生の居場所があまりなくて居場所が欲しいということ、居場所で学生とか、高校生だけではなく、大人や、お年寄りの方との交流の場も欲しいという話もありました。

富谷の資源として人がたくさんいるということや、緑があるだけではなく、人との繋がりが多いところも良さとして上がっていたのでそちらを活用したいという話もありました。

支援として、子どもたちが参加するラジオ体操の巡回や、ボランティア活動をもっと分かりやすく、情報を発信することで、高校生や学生の方が参加しやすくなるという話もありました。また、私たちの班では様々な団体活動をしている方がいたんですけれども、そちらの方々の情報、活動内容を知る機会がもっとあれば、団体同士での交流ももっと深まっていくという話がありました。

**○グループ 3**

私たちの方で出た課題と資源は、主に三つありまして、一つ目が、富谷茶の復活に関することで、それは富谷茶の栽培方法とか、販売方法について、もっとより議論する必要があるという課題と、新町やとみやどが今活性化されてますが、そこと富谷茶との関係性という点でも課題として挙がりました。

あと富谷の歴史が皆さんが思っている以上に奥が深いという話が出たので、よりそこをもっと資源として活用していく必要があるという話と、あと一番重要だよねって出てきたのは横の繋がりという話で、やっぱり縦の繋がりが多いと思うんですが、横の繋がりというのが本当に少ないので、そこをよりもっと課題として広げていく必要があるという話が出ました。

支援の方は４つ出ましたが、まとめて言うと「子ども」です。子どもが富谷に関わる機会は少なかったりとか、子どもに私たちが経験してきたことを伝えていく機会が少なかったりとか、こういう子どもがこれから、大切な人材なのにそういった機会が少ないというのは本当にもったいないし、そこの部分の機会を増やしていく支援が必要だとなりました。あと幼稚園とか小学校あたりだと子ども会、町内会の参加があって関わる機会が多いんですけど、中学生、高校生、大学生になると、富谷と関わる機会が少なくなってしまうので、富谷に関わりたいと思っていても何したらいいかわからない子どもたちが多いので、何かしたいと思っても、何をすればいいかわからない人たちへの支援っていうのも、必要だという話がありました。

あとは、無償ボランティアが多い中で有償ボランティアの増加も必要だなと思うし、そういったボランティアの増加をより広めていくためにはやはりその横の繋がりを強化することで、「私、土曜日何やったよ」というのを、子どもたちや学生同士だったら、学校とかで話し合って、ボランティアの参加率も上がっていくのではないかなというような支援の話がありました。

7.座長まとめ

今回のミーティングは、高校生の参加もあり、まさに多世代の共創の場となりました。共創には、多様なセクターや世代での議論が重要であり、何より楽しいということが実感されたのではないかと思います。高校生、大学生にとっても、地域の方の話、それも講義形式ではない、ざっくばらんな話を聞くのは貴重な機会になったと思います。フリーディスカッションは盛り上がりましたが、これも一つの共体験なのです。創造性ある様々なアイデアが思い浮かんだことと思いますし、議論の結果がホワイトボードにしっかりと書き込まれています。この内容は事務局のほうでとりまとめていきます。それでは、これからも富谷の協働を共に創り上げていきましょうということで、終わりにしたいと思います。本日はありがとうございました。

8.閉会

---